【入選二席】

ごきぶり

三川支部　如月ちかし

急に、すべての騒音が止んでしまつた。短かい、恐ろしい程の靜寂が次の瞬間をみたした。すると訳の判らない声が、あちこちから発酵するようにわきあがつてきたその声のなかから、汗と粉炭とに真黒く光つた、怒りを含んだ幾つもの顔が、自分に襲いかかつて来るのを下山弘は感じた。

彼は長椅子の上で体をよじらせながらそれから逃れようと努力した。がそれは無駄だつた。彼の頭は固くて、冷めたい物体の端で行き詰つていた。それからの椅子の上での彼の体の動作は無意味なからまいの継続となつた。そして、彼が眼を覚したのは、最後の力を出して体をのけぞりあげた時による激痛を頭に感じたからだつた。そこには、大きな耐爆電話器が彼の頭を押えつけるようにして立ちかかつていた。

弘の体は下着のしたでべつとりと汗をかいていた。彼はうつろな眼であたりを見渡した。

詰所のなかは、彼がはいつて来た時と、なんら変つているところはなかつた。中央に長いテーブルがあり、向側にもう一つの長椅子があつて、それに山神茂太が三十何年かなる炭坑生活で蒼白く、憔悴した顔をこちらに向け、口をあけ、眼を閉じてもたれかかつていた。

湿度と温度の高い坑内の電気詰所のなかで、下山弘の脳細胞が元にもどるのには多少の時間が必要だつた。

弘は何かの金属のふれあう同間隔の音に神経のすべてを集中しようとした。が室内の生暖かい空気は、彼の意識を遮り、あくびを催させ、脳神経のすべてを麻痺させだしたので、それを、彼はさつきの夢の継続ではないかと思つた。

その時、近くのポンプが急に運転し始めた。

彼はその振動のひどい音にびつくりして、椅子を立つた。

彼は、後頭部のところに、今まで感じていた血液が少しずつ循環し始めるような鈍い快感に似たものを感じた。そなつてくると、今まで萎んでいた彼の脳は、水気を吸つた海綿のようにふくれあがり、すべてが彼の意識のなかに流れ込んで来るのである。

リーン、リーン、リーン、リーン、リーン。

彼はさつきの金属のふれあう音を今度は判然とつかむことが出来た。

五つベルである。電気の故障を知らせる電話の呼鈴だ。

弘は体の先端に瞬間、疼痛のようなものを感じ、体をよじらせた彼の右手は機械的に耐爆電話器の引手にかかつていた。

墨塗りの部厚い鉄のフタがすばやく開かれると、甲金に掛つたままの送受話器から大きな声が流れて来た。

「もしもし……おーい、おーい、電気やぎん……電気ヤ……」

「は、はい……デ、電気」

弘の紹は汗で光つている。

「バンツアの止つたばん、まわんが……」

弘の耳には、電話のその声に交つて、恐のなかの訳の判らない声がはいつて来た。そのなかから憤然とした大きな声がはつきりと響いた。

「電気ヤはなんしよつと一番儲かりよるときに……」

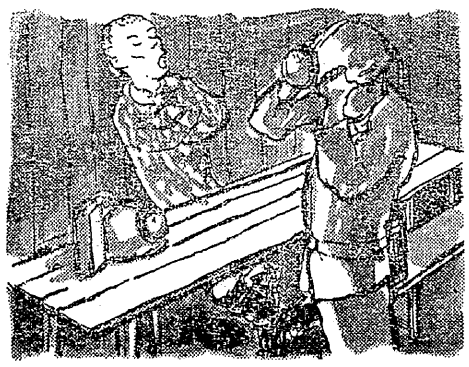
弘の全神経は眩倒にも似たその声に緊張する。それは一瞬仮眠の状態にあつたという彼の責任感から来る良心的な精神の表われだつた。

彼の顔は緊張の為にあかく充血し、額も体も汗でべとべとになつていた。

彼は頭を押えつけられるような重量感のある鉄帽をかぶると、すぼやくキヤツプランプを取付け、詰所を出た腕時計は十二時である。

後一時間で、独占資本家連が莫大な資本を投入して、人間性を喪失させるような機械化した坑内での労働の時間は終るのである。けれどもこの一時間は切羽で真黒くなつて働いている採炭夫達にとつては、一日の労働のうちで最も過重な時間だつた。切羽の諸条件が輪つて、順調に出炭の運びとなるのはこの時間である。

弘もそのようなことは識つていた。が人間の本能的な欲望からなる労働意欲に似たものは、自らに労働条件を低下させ、保安の観念をも減少させることになるのである。組合も諸負給の撤廃をそのような観念の基に打出しているのだが、それはより多くの利潤を獲得しようとする現場の労働者によつては、理想的なものに思われているのだつた。けれども弘たち電工はというと、彼等は全くの固定給者といつてよかつた。彼等は間接夫として坑内で働いているのである。



機械化の為の新しい機械が導入されると、それだけその機械に対する操作が電気的に複雑さを増しわれわれ電工たちは今までよりも多くの神経を消耗させねばならなくなつて来るのだ。そのようなことについては他の職種の鉱員たちは何一つも理解してはいないではないかと、弘は考えてくると、何か反抗したい気持にかり立てられた。

バンツアー原動機の過剰負荷によるマグネツトスイツチの過電流継電器が働いているスイツチ座までは、危険で、歩行困難な坑道を通らなければならない。

彼はその道筋を頭に入れて、故意に悠然とした歩調で足を運んだ鉄分を含んだあかい水溜の坑道を通つて、弘は小さな通気門の扉を押した。すると風が奔流のように、流れ込んで来て、鉄枠にぶら下つている鉄板の名称札が、鉄枠とふれあつて急に音をたて始めた弘はその音に、急に何ものかに追いたてられるようなものを感じて歩調を速めた。彼の頭のなかには、さつきの五つベルがけたたましく鳴り響いて来たからだつた。

弘は、鉄枠と共に天盤が崩落して、坑道をふさいでいる細い穴を入若し一度通り抜けるとき、天盤が崩れ落ちれば、それでおしまいだぞと自分に云い聞かせ▽出来るだけ体をまるめ、すばやく通抜けて、急勾配の坑道をよじ登りだした。

平担な坑道に出た彼は、第二の通気門の扉を押した。急に冷めたい空気が入込んで来て、湿気を含んだ暖かい空気は微粒子の水滴となり、暗黒の坑道に照された彼のキャツプランプの光を受けて、それ等は小さな真珠のように輝き、彼の体の動きに飛散し始めた。

弘はスイツチ座に着くと、マグネツトスイツチの過電流継電器の復帰ボタンを力強く押した。

スイツチは待ち構えていたように、マグネツトが強力な音を出して吸引し、喰り出し始めた。

弘は痩せ細つた手をスイツチの上にあててみた。大きなスイツチは、まるで逆上した人間のように全体がかなりの温度にあがつていた。

弘の尖つた眼には、緑色のスイツチの正面に、白エナメルで書いてある七十二アンペアと云う許容電流の数字が、痛い程映つた。

（つづく）

【奥様メモ】

晴着のシミとり

お年始だと出かけたミチ子が、ベ

ソをかいています。みると一チヨラの晴着がシミだらけです。何とソでに墨汁、エリに白粉、食入りにもヒザにおしよう油までシミています。それに一郎も自転車乗りして買つたばかりのズボンは機械油と泥だらけ、鉄のサビまでつけて帰つてきたのです。昨日お父さんの服を手入れした矢先なのでお母さんはすつかり困つてしまいました。サア、一体どうしたらいいでしようか。

おこたえ　▽墨汁＝米つぶに石けんをまぜてぬりつけ、あとは水の中でもみだし、さらに大根汁をつける。

▽白粉＝水、石けんで取れなければ樟油をぬりキハツ油でとる。

▽機械油＝キハツ油でダメなら、石けん液、アンモニア水を足せばさらに完全。植物油も同じ

▽泥＝刷毛でぬぐいお湯で石けんを使う。ホウ砂だと完全。

▽鉄のサビ＝シユウ酸を熱湯約一合に茶さじ半分入れて使う。

雑記帳（5）

バカ値落札に想う

岡浦益実

×××××××××××××××××××××××××

これは私の憶測や取越し苦労にすぎないかも知れないが、その日その日の生活にあえぎながら働いている勤労者が容赦なく所得税を給料から天引きされ、一銭のゴマかしも許されずとりたてられているのを尻目に、バク大な脱税もできるかも判らないし、他の工事でうんと儲けて穴埋めすることも容易なワザかも知れない。いやこのような邪推はよして、働く人達に目をむけて見よう。東宮御所の造営にご奉仕する、患者憂国をモツトーとする社長さんの下に、汗を流す労務者が何千人いるか何万人いるか図り知る由もないが、その人達は満足するほどの年末手当を頂戴したであろうか？。たとえ満足できるボーナスを貰つたとしても、幾らあつても邪魔にならないのが金だし、中には、馬鹿げた消費をしなくとも、そんな余分の金があるのなら俺たち労働者に分けてくれても良さそうなものだ……と考えた人もあるだろう。

こんなことには情気もなく金をすてる会社も、ちよつと業績が思わしくないと、すぐ「それ赤字だ、それ営業不振だ!!」とP・Rにうつつをぬかすのだ、これはどこの会社も共通したものらしい。労働者に納得のいく賃金を払い、まだ投げだしてもいい残り金があるなら、正月を迎えることもできずに生活している不幸な人たちのために歳末助け合い運動にでも募金したらどうだろうか？。

婚約をしたといつては国民を馬鹿さわぎにさわがせたり、新居をたてるといつては不愉快な思いをさせ、暴室の存在は徳なくて害多く、やつかいなものである。

金額は何処からでるのだろうか？誰にそのシワ寄せがくるのか？、どこかでこの差額（といつても殆んど全部だが）は搾取され、ふんだくられるのではないか？。

このように大きな会社にしてみれば、搾取と公工事費の水増しとか全然意識しなくとも、これ位の金額はどこからともなく舞い込んでくる仕組になつているのかも知れない。

労働者のものにしてくれます。しかも読んでいくうちに労働者としてのものの考え方、真実を見極める力を培つてくれます。私たちの頭の上に覆いかぶさつているごまかしのヴエールを一枚一枚はぎとつてもくれます。

またサークルの基礎的学習としてのテキストなどにつかつても適当だと思います。この本に接したのが一つのきつかけとなつて活動家に育つていつた五、六人の仲間を数えることもできます。この本を読んだ者にとつて、それは少からぬショツクとなり、また労働者としての開眼への第一歩ともなるでしよう。私たちの学ぶ知識は労働者みずからの知識でなければならないことはいうまでもありません。

昔ギリシヤに学問奴隷というものがあつて、奴隷の所有者は奴隷に学問をさせ自分の子供の家庭教師として使用しました。人間としての意識をもたぬ奴隷は、自分が奴隷という不合理な状態にあることも忘れて主人の子供に、奴隷制こそ人類本来の制度であり、奴隷を使うときにはどんなふうに使えば命令に従順であるかというようなことを、矛盾もなく教えていたのです。

これは奴隷がみづからの学問を持たなかつた悲劇です。

案外私たちは資本主義社会の文化の中でこうした間違いを犯してはいないでしようか。

それは私たちが賃金奴隷だからです。

私たちは労働者としての自分自身の心の中に素直な哲学をもつております。ただ気づかずにいるだけです。それをこの本は具体的に再確認させてくれると思います。

働く仲間にひろくすすめたい本です。

人民の哲学（唯物論篇）一二〇円
〃（弁証法篇）一五〇円
〃（哲学史篇）一三〇円

菅木書店　高橋　庄治　著

港務支部　古賀　正澄

映画

ヒューマニズムを謳う問題小説の映画化

人間の条件

北満洲の黄塵の広野を舞台にして描く昭和十八年の物語である。

梶（仲代達矢）と美千子（新珠三千代）は本土より渡つてきて、鉄鉱会社に勤めるうち愛し合い結婚した。梶は反戦的な男とののしられ、彼自身も戦争への疑惑を抱いていた。

しかし、友人影山（佐田啓二）の勧めと召集免除の条件で、若虎鉱山の労務管理につくが、戦争は次第に激烈を極め、二割増産が緊急に要求された。軍はその手段として北支の捕虜六百名の特殊工人を酷労させたが、梶は管理をもひきうけさせられる。

だが、ヒューマニストの梶は、彼ら特殊工人を人間として扱おうとし、現場監督の連中とするどく対立する。梶は妨害の壁により囲まれるが、同僚沖島（山村聰）だけは唯一の理解者だつた。

一方、電流の通つた鉄条網の張りめぐらされた宿舎に入れられた特殊工人らは、脱走の密計を企てた張命賛（山茶花究）は娼婦頭の金東福（淡島千景）を利用する。金東福は色仕掛けで梶のボーイ陳（石浜朗）をそそのかし、鉄条網の電流を止めさせ、彼らをまんまと脱走させる。

こうした中に、梶の努力は報いられて、二割増産の目標が達せられる。

あくまでも悪の手を伸す張命賛は、二度、三度と脱走を企てその代償でボロイ儲けをする。張命賛の私欲の手先になつていたと知つた限は、梶への申し訳けなさに高圧ボルトの通う鉄条網にとびこんで死を遂げた。工人の一人である高（高原伸二）は現場監督に抵抗したため、憲兵隊の手で処刑され娼婦楊春蘭（有馬稲子）との清純な愛情も水泡と化した。

梶は残酷な死刑場の血臭たゞよう光景に堪えられず、決死の覚悟で処刑の中止を申し出るが、死の代りに留置場にぶちこまれ、猛烈なリンチを受ける。そして解放されたときには召集令状が待つていた……。

（14日より27日まで大天地で上映）

なんぼつ本棚（17）

無知は労働者の敵

「人民の哲学」

哲学というといままでは非常にむづかしい苦苦しい学問のように思われてきました。これは労働者大衆を無知な鎖にしばりつけておくための、支配者階級の政策からきたもので、教養ある反動学者たちは、わざわざことやかましくむづかしい言葉をならべて常に学問のない大衆をこけおどしにする武器にしてきたのです。

この本は三冊に編集されており哲学をわかりやすく、また面白く